新潟県中越大震災から 20 年のアフター復興プロセス研究

公益社団法人中越防災安全推進機構　事務局長　諸橋和行

１．研究の背景と目的

2024 年 10 月 23 日で、新潟県中越大震災の発生から 20 年が経過した。震災当初より被災地（特に中山間地域）では、新潟県中越大震災復興基金を原資に、復興に向けて様々な取組が実施された。震災から 10 年経った 2014 年度には、新潟県中越大震災復興計画における目標年次を迎えることから、新潟県はこれまでの復興の取組を総括し、残された課題への対応を検討するため、中越大震災復興検証調査会を組織して大々的な復興検証を行った。その成果は「新潟県中越大震災復興検証報告書」に取りまとめられている。

しかし、震災から 10 年以降、現在に至るまでの 10 年間（概ね 2015 年～2024 年）、被災地がどのような変遷をたどり、現在はどのような状況にあるのか、そこには中越大震災の発生がどのような影響を及ぼしているのかといった調査や研究はほとんど行われてこなかった。十日町市池谷集落など、災害からの復興を機に限界集落から脱し、持続可能性を高めた地域もある一方、多くの被災地域においては、「一見、数字的には」他の地域同様、過疎高齢化が進行し、地域の維持が表面的な課題となっている。復興事業として高い評価を得たコミュニティ再生の取組や外部人材の活用等は、その後の被災地域の歩みにポジティブな影響を及ぼしたと考えられるものの、具体的な検証は行われていない。

本研究は、新潟県中越地域を対象に、「中越大震災からの 10 年の復興の取組や人材はその後の地域の 10 年にどのような影響を与えたのか」、「地域が直面している現状と注目すべき萌芽は何か」といった観点から今一度、地域の方々の声を聴き、研究者・実務者・学生等のチーム（研究会）でアフター復興プロセス及び今後のあり方を検討し、広く発信することを目的に実施したものである。

２．全体概要

２.１　研究内容とスケジュール

本研究で実施した内容は、①インタビュー調査（中越地域のキーマンを対象とした復興プロセスインタビュー調査）、②復興プロセス研究会、③アドバイザリー会議（復興評価・支援アドバイザリー会議）、④シンポジウムである。研究全体の構成及びスケジュールは、図 1 及び図 2 に示すとおりである。

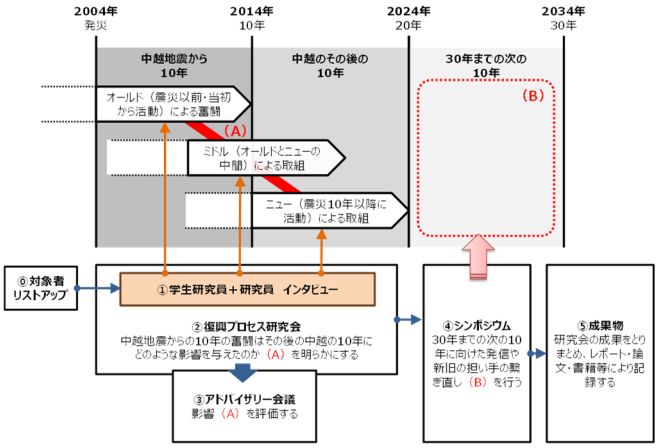

図１　研究全体の構成

方法	スケジュール（2024年度）								
	4	5	6	7	8	9	10	11-12	1-3
1）インタビュー調査									
2）復興プロセス研究会	❶	❷		❸		❹		❺	❻❼❽
（学生合宿）			❶						
3）アドバイザリー会議			❶				❷		
4）シンポジウム								❶❷	
5）成果物とりまとめ									

図２　スケジュール

２.２　実施体制

本研究の実施するため、「復興プロセス研究会」を再結成した。復興プロセス研究会は、中越大震災の 4 年後、2008 年に設立され、県内の若手研究者と復興支援に関わる実務者をメンバーとし

て、当初は 2 ヶ月に一回程度の頻度で集まり、新潟県中越大震災復興基金も活用しながら、被災地と関わり続けるとともに、「復興とは何か」を真剣に議論した。中越大震災から 10 年を機にそのプロセスを記録し、論文・報告書・書籍にまとめ、研究会の活動もそこで一区切りとなった。本研究を遂行するにあたり、新たに学生研究員を加え、この復興プロセス研究会を再度復活させたのである。表 1 のとおり、専門家・実務者による研究員 11 名、学生研究員 11 名で構成され、事務局は中越防災安全推進機構が担った。

表 1　復興プロセス研究会　構成員

【研究員】

氏名	所属
上村靖司	長岡技術科学大学
澤田雅浩	兵庫県立大学大学院
松田曜子	京都大学
宮本匠	大阪大学
井内加奈子	東北大学
小澤広直	長岡工業高等専門学校
山﨑麻里子	北陸地域づくり協会
諸橋和行	中越防災安全推進機構
赤塚雅之	中越防災安全推進機構
阿部巧	中越防災安全推進機構
石塚直樹	中越防災安全推進機構

【学生研究員】

氏名	所属
中村早希	大阪大学　4 年
三宅奈央	大阪大学　4 年
松本海璃	大阪大学　4 年
岩成南奈	大阪大学　4 年
溝口陽音	大阪大学　4 年
西本理沙	大阪大学　4 年
岸風花	大阪大学　4 年
中沢優希	大阪大学　4 年
吉川直樹	長岡技術科学大学　M1
藤田裕	長岡技術科学大学　3 年
蓮田和華奈	大阪大学　3 年

2.3 インタビュー調査

中越大震災の被災地域において、主に震災以前・当初から地域づくりや復興活動してこられた方（仮に「オールド」とする）、主に震災 10 年以降に地域づくり活動に取り組んでいる方（仮に「ニュー」とする）、オールドとニューの中間（仮に「ミドル」とする）に区分し、対象者を選定するとともに、インタビュー調査を実施した。

インタビューの実績は、表 2 のとおりである。本研究期間が始まる以前よりプレ調査としてインタビューを実施しており、その結果を含めて本研究で取りまとめと分析を行っている。

写真 1　インタビューの様子

表２　インタビュー調査の実績

No	実施日	氏名	地域
1	2023/10/25	星野晃男	川口
2	2023/11/11	星野伸一	川口
3	2023/11/11	星野久子・國樹	川口
4	2023/11/11	星野菊代	川口
5	2023/11/11	星野靖	川口
6	2023/11/11	渡辺サチ	川口
7	2023/11/11	小林正利	川口
8	2023/11/11	星野進	川口
9	2023/11/11	星野正子・秀雄	川口
10	2023/11/17	山森瑞江	川口
11	2023/11/18	中林浩	川口
12	2023/11/18	星野哲雄	東山
13	2023/12/18	鈴木俊郎	東山
14	2023/12/19	山本浩史	池谷入山
15	2023/12/19	大橋昭司	小国
16	2024/1/19	佐藤瑞穂	片貝
17	2024/1/19	山森健也	川口
18	2024/1/19	星野瑠枝子	川口
19	2024/1/20	山森瑞江・小山身枝子	川口
20	2024/1/23	砂川裕次郎	川口
21	2024/2/3	平沢勝幸	川口
22	2024/2/3	青木勝	山古志
23	2024/2/3	平澤忠一郎	東山
24	2024/2/4	鈴木仁	東山
25	2024/2/26	五十嵐なつ子	山古志
26	2024/2/26	田中康雄	山古志
27	2024/2/26	内山英機	小国
28	2024/2/26	大橋昭司（2 回目）	小国
29	2024/2/27	竹内春華	山古志
30	2024/2/27	細金剛	若栃
31	2024/3/21	福田洋介	山古志
32	2024/4/15	多田文子・武士俣利一	栃尾
33	2024/4/15	広野光春	栃尾
34	2024/5/27	坂牧颯人	山古志
35	2024/7/14	友野正人	東山
36	2024/7/14	関芳之	東山
37	2024/7/14	星野秀雄（2 回目）	川口
38	2024/7/14	平澤望	川口
39	2024/7/14	砂川祐次郎（2 回目）	川口
40	2024/9/1	喜多村茜	川口
41	2024/9/2	渡邉則道	長岡
42	2024/9/3	五十嵐豊	山古志
43	2024/9/26	廣井秀一	東山

注）本研究期間以前のインタビューを含む

２.４　復興プロセス研究会

復興プロセス研究会は、表 3 に示すとおり、オンラインを併用しながら、研究期間中に合計 8 回開催した（研究期間前を含めると通算 12 回）。研究会では、インタビュー調査の結果を報告・共有するとともに、被災地の現状と中越大震災 20 年の復興プロセスについて幅広く議論し、仮説に対する検証を行っている。

表３　復興プロセス研究会の開催実績

研究会	開催日	参加人数
第 1 回（通算 5 回）	2024/4/24	16
第 2 回（通算 6 回）	2024/5/29	14
第 3 回（通算 7 回）	2024/6/25	10
第 4 回（通算 8 回）	2024/7/24	11
第 5 回（通算 9 回）	2024/10/16	11
第 6 回（通算 10 回）	2025/1/8	15
第 7 回（通算 11 回）	2025/2/12	13
第 8 回（通算 12 回）	2025/3/3	14

２.５　アドバイザリー会議

復興プロセス研究会で取りまとめた結果を共有し、全国の地域づくり・防災・減災の有識者から評価とアドバイスを得るため、復興評価・支援アドバイザリー会議を計 2 回開催した。この会議も中越大震災発生から 10 年までは中越防災安全推進機構で毎年開催していたものである。今回の委員は表 4 のとおりであり、いずれも中越大震災の復興に深く関わった方々で構成されている。

表４　復興評価・支援アドバイザリー会議 委員

氏名	所属
中林一樹	中越防災安全推進機構　理事長
平井邦彦	長岡造形大学　名誉教授
室﨑益輝	兵庫県立大学　名誉教授
福留邦洋	岩手大学　教授
田口太郎	徳島大学大学院　教授
山口壽道	元山の暮らし再生機構　理事長
稲垣文彦	ふるさと回帰支援センター副事務局長

【第１回　復興評価・支援アドバイザリー会議】

〇日時：2024 年 6 月 25 日（火）15:30～17:30

〇場所：長岡震災アーカイブセンターきおくみらい
（オンライン併用）

〇出者：アドバイザリー会議委員
復興プロセス研究会研究員・学生研究員

〇次第：1）開会・参加者紹介
2）復興プロセス研究経過報告
3）討議
4）次回案内・閉会

〇主な討議内容

復興プロセス研究の背景と目的、実施体制、全体スケジュールを説明し、2024 年 6 月時点で実施してきたインタビュー調査の結果を報告した。

委員からは、「積極的にニューの話を聴き、関係性の継続を探る」、「信託的な受け継ぎは集落よりも少し広いエリアで起きている」、「三極構造の行政機能が欠如し、二極構造になりつつある」、「研究だけでなくアクションを」といった意見をいただき、今後の研究に反映することとした。

写真２　第１回アドバイザリー会議の様子

【第２回　復興評価・支援アドバイザリー会議】

〇日時：2024 年 10 月 23 日（水）10:00～12:30

〇場所：長岡震災アーカイブセンターきおくみらい
（オンライン併用）

〇出者：アドバイザリー会議委員
復興プロセス研究会研究員・学生研究員

〇次第：1）開会・参加者紹介
2）復興プロセス研究経過報告
3）討議
4）閉会

〇主な討議内容

2024 年 10 月時点で実施してきたインタビュー調査の結果を報告し、インタビュー結果の例を示しながら、復興プロセス研究会で議論してきた仮説・論点を提示した。

委員からは、「中間支援機能を地域が持ち始めているのではないか」、「中間支援組織は地域密着に移行している」、「地域の持続には隙間が必要」、「豊かな相互依存関係の視点が必要」、「研究会を継続できるといい」といった意見をいただいた。

写真３　第２回アドバイザリー会議の様子

2.6 シンポジウム

中越大震災 20 年の動きと連動させながら、研究の成果を発信するとともに、中越地域内外の地域づくりと防災・減災の新旧の担い手の交流を図ることを目的に、日本災害復興学会 2024 長岡大会と連携して、「公開シンポジウム（中越地震 20 年記念シンポジウム）」及び「分科会 復興プロセス研究会ラウンドテーブル」を開催した。

図 3　公開シンポジウムチラシ

【中越地震 20 年記念シンポジウム】

日本災害復興学会 2024 長岡大会 1 日目の公開シンポジウムは 2 部構成であり、その第 2 部として「中越地震 20 年記念シンポジウム 震災を乗り越え地域の存続へ」を開催した。

○日時：2024 年 11 月 9 日（土）15:00～17:30

○場所：アオーレ長岡　市民交流ホール A

○プログラム：

基調講演：「山古志の復興・そして感謝」

田中康雄（NPO 中越防災フロンティア）

パネルディスカッション「次世代へのバトン」

モデレータ　：澤田雅浩（兵庫県立大学）

コメンテータ：稲垣文彦（ふるさと回帰）

パネリスト　：竹内春華（山古志）

佐藤瑞穂（小千谷）

喜多村茜（川口）

坂巻颯人（山古志）

写真 4　中越地震 20 年記念シンポジウムの様子

【分科会 復興プロセス研究会ラウンドテーブル】

日本災害復興学会 2024 長岡大会 2 日目の分科会として、復興プロセス研究会の企画によるラウンドテーブルを開催した。

○日時：2024 年 11 月 10 日（日）14:30～16:50

○場所：アオーレ長岡　市民交流ホール C

○プログラム：

趣旨説明

復興プロセス研究会経過報告

研究会関係者・ゲスト討論者からのコメント

ラウンドテーブルディスカッション

写真 5　分科会ラウンドテーブルの様子

３．研究成果

本研究は、復興プロセス研究会の研究員及び学生研究員による中越地域のキーマンを対象としたインタビュー調査を軸として、そこから聞き取ったライフヒストリーから、中越大震災後 20 年に至る復興プロセスを断片的に読み取り、復興プロセス研究会及びシンポジウムでの議論を通じて、「中越地震からの 10 年の奮闘はその後の中越の 10 年にどのような影響を与えたのか」、「その先の 30 年後に向けて地域はどうあるべきか」を見出そうと試みた。

明確な結論として提示するのは難しいが、得られた知見のエッセンスを以下に紹介する。

■ 中越地震からの 10 年の奮闘は、その段階では活動への関りが無かった地域の次世代や外に住む集落関係者などに「見られていた（肯定的な見方ではない場合もある）」。
■ 地域の復興や地域復興支援員の取組は、「気配」をつくっていたのだろう。
■ 中越地震から 10 年の奮闘は、結果として奮闘を見ていた次の担い手の母数や、バトンの受け渡し期間（気配を感じているだけのアイドリング期間）を拡げ、そのことがその後の担い手の主体的な関わりにつながったと考えられる。
■ 中越地震からの復興によって進められてきた集落外人材（10 年検証における「本気で付き合える仲間」）との交流は、特定の人と人との結びつきであり、時間が経過した現在、地域内の次の担い手に引き継がれていないことも多い。
■ 震災後、外部との交流を盛んにしてきた集落が、集落そのものの維持が難しくなってきているという見方もある。一方でオールドの良かった思い出としては生きており、あの頃は楽しかった、比較すると今は寂しい、と語られる。
■ 今後、スリム化や合理化が進む地域経営の中で、どのように本気で付き合える仲間をつくっていくことができるか。
■ 行政は震災 10 年以降、事務拠点制や支所の地域づくり業務に特化した位置づけ等により、今後のさらなる人口減少（及び職員数の減少）に備えた体制構築を進めている。
■ 市民の行政窓口に関する利便性は変わらないものの、行政職員の負担は大きくなっている。現在も地域おこし協力隊や集落支援員等の人的支援はあるものの、「人的支援をしながらニーズを把握し、事業メニューを組成していく復興支援・地域づくりの取り組み」は、復興基金修了後、その連続性は失われていると考えられる。
■ 中越は、復興支援の答えも分からないアマチュアが、試行錯誤で進めてきた。
■ 20 年が経過し、その時中心となり経験を積んだ玄人が第一線を離れていく中で、新しい芽が見えてきた（後継者を指名して教育した例は少ない）。
■ 復興の教訓が叫ばれるが、教訓は本当に良い影響を与えるのか。皆で悩んだり、失敗したり、後戻りできるプロセスが重要だったのではないか。教訓が求められがちではあるが、教訓を「転ばぬ先の杖」とすることが、本当に良いことなのか。

４．終わりに

新潟県中越大震災から 20 年が経過し、復興の雰囲気が薄れてきた地域は今、どうなっているのかーこれが本研究の出発点であった。かつて被災した地域は、他と同様に過疎が進んでいるように見える。しかし、本研究により、特にニューの方々及び学生研究員との「出会い」「共有」「協働」のプロセスを通して、「中越大震災から 20 年が経過した中越では、地震後の復興の奮闘が現在の地域に良い影響を及ぼしている」ことを発見することができた。それは当人自身も認識していないことではあるが、確かに存在している。そのことを中越のオールド、ミドル、ニューの方々と復興プロセス研究会のメンバーが一緒に語り合うような場が求められているのではないか。また一つ、新しい課題をいただいた。